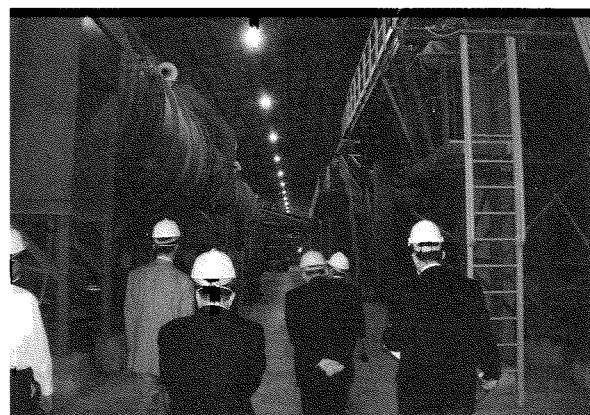


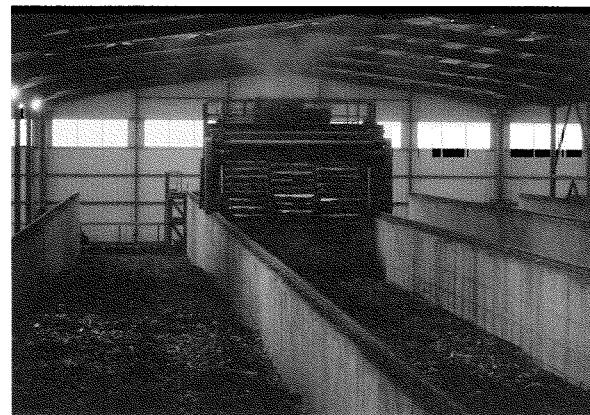
見学した限りでは、回収されたコンポストにはプラスチックごみや紙ごみがかなり混入しており、品質面で疑問がある。しかしながら、先方の説明では、ギリシャは土地が枯れており、荒野が多いことから、その緑化のためにコンポストの需要は多く捌き先に困らないとのことであった。(ギリシャでは自国製のコンポストだけでは量的に不足しており、オランダ等からの輸入も行われているとのこと。)



施設内部



回収された RDF (フラフ状)



コンポスト醸酵槽

RDFについては、固形化されておらず、粗いフラフ状のもの。既に、一部は発電施設に出荷されていて 13 MW/日の電力を生み出している。今後は、更にセメント会社の燃料用に販路を拡大していく計画とのことであった。EU全体では、セメント製造用燃料における廃棄物使用率は 75 % であるが、ギリシャでは未だ 1 % に満たず、この用途での活用拡大余地は極めて大きい模様。

(3) 最終処分場

水処理施設を備えた 25 ha の敷地を持つ処分場。直接搬入される固形廃棄物（都市ごみ・産廃）、下水汚泥、バイオ汚泥約 4,300 t/日、資源化施設を経由した残渣 1,100 t/日、計約 5,400 t/日を受け入れている。本処分場は小区画に分割されて運営されている。埋め立てが完了した区画から閉鎖して公園にすることになっており、毎年 5 ha が公園に変わる計画。建設費は約 25 億円（63 億ドラクマ＝18.5 百万ユーロ）。



最終処分



最終処分

(4) 医療系廃棄物焼却炉

アッティカ地方が直面する大きな問題の一つである医療系廃棄物（病院ごみ）の適切な処理に対応するため建設され、2001年より稼動。

近代的な排ガス処理装置を備えたロータリーキルン炉であり、能力は30t/日。建設費は約9億円（23億ドラクマ＝6.7百万ユーロ）。

5. 所感

施設入口の事務所において施設の概要説明を受けたあと、バスにて小高い丘を登り現場見学へ向った。最終処分場は管理が不十分で、ごみが露出しており、表面をカモメの大群が覆い、野良犬もうろついている有様であった。

資源化施設は、ごみピットが開放型で、最終処分場へ運ぶ残渣も野積みの状態ですぐ脇

に置かれているため、近くと強烈な臭気が鼻をついた。大きな機器の並ぶ施設内も、機器が全て開放型であることから臭気が強く、見学中終始苛まれた。受入れたごみは“ドライとウェット”・“大と小”という大雑把な分類だけで施設内の機器による機械選別にかけていることから、成果物であるRDFやコンポストには異物混入が多く、品質にははなはだ疑問の残るところである。

ギリシャにおけるごみ処理、資源化の動きはやっと緒についた段階と言わざるを得ない。「今回、視察でお世話になった方々に日本の施設を見せてあげたい！」が偽らざる感想である。

（調査担当：吉川 彰、大山智司、堀北弘之、山岡亮一、杉野文昭、阿部幸生、池田弘貴、小木 均、中村立雄、中森 滋、横山朝彦、横山道夫、石倭行人）



事務所前での集合写真